View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by TUIS Academic Repository

高校生におけるネットいじめの実態

原田恵理子*

本研究では、高校生のネットいじめの実態について調べ、ネットいじめの実態に応じた支援のあり方を検討した。高校生325名を対象にした質問紙調査を行い、パソコンと携帯電話によるネットの使用、伝統的いじめとネットいじめの併存、傍観者の経験、ネットいじめに対する支援のニーズを検討した。その結果、伝統的いじめとネットいじめの併存は１％、傍観した経験は７％であった。また、多くの生徒がネットいじめに対する教育を希望し、学校及び学級に対する心理教育の重要性が明らかとなった。

キーワード：ネットいじめ、インターネット、高校生、心理教育

Actual Conditions of High School Students' Cyberbullying

Eriko HARADA*

The aim of this paper is to investigate the actual conditions of the high school students' cyberbullying, and examine the ways of backing them up depending on the kinds of cyberbulling. We asked 325 Students with a questionnaire to survey their frequency of internet use by personal computers and cellphones, their customary bulling or cyberbulling, the experiences as a bystander, and finally considered needs of the support for cyberbullying. As a result, we found that 1% of them were both bullies and cyberbullying, and 7% of them were bystanders. Moreover, many students wanted the introduction education of means to prevent cyberbullying, and this it became obvious how important psycho-education toward school and class is.

Keywords: cyberbullying, internet, high school students, psycho-educarion

*東京情報大学　総合情報学部　総合情報学科
Tokyo University of Information Sciences, Faculty of Informatics, Department of Informatics

2013年７月４日受理

1．問題と目的

急速な情報社会の発展の中、パソコンや携帯電話などのネットやメールは、今日の青年にとって重要なコミュニケーション活動の一部となっている（Wartella & Jennings, 2000）。日本の高校生におけるインターネットの利用率は94.4％、携帯電話によるメールの利用率は96.5％で、どちらにおいても男女の差は見られず（内閣府，2013）、登校時から放課後、帰宅途中、深夜まで頻繁に利用していることが指摘されている（遊橋，2006）。友人とのコミュニケーションを目的とするネット利用時間についてはパソコンよりも携帯電話の方が長く（Ishii，2004）、特に携帯電話による一日平均のネット利用時間の使用については、男子よりも女子の方が高い傾向にある（内閣府，2013）。このようなコミュニケーションの実態から、長時間によるネットコミュニケーションはネットいじめのリスクが高まることが危惧され（内海，2010）、近年では、ネットいじめが広がりをみせている（文部科学省，2008）。

ネットいじめは国際的にも増加傾向にあり、内海（2010）によると、青年期を対象に調査したネットいじめの実態は、アメリカ、イギリス、カナダの研究においてネットいじめの対象者が２割から３割にのぼり、ネット上でネットいじめを目撃したことがある青年は４割を超えていた（Beran & Li, 2005; Patchin & Hinduja, 2006; Smith, Mahdavi, Carvalho, & Tippett, 2006; Ybarra & Mitchell, 2004）。国内においても、文部科学省が、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、いじめの様態に「パソコンや携帯電話などで誹謗中傷や嫌なことをされる」という項目を平成17年度から設け、ネットいじめの実態調査を行っている。表１は、その項目の件数と構成比の推移を平成17年度から23年度まで校種別にまとめたものである。調査開始より高等学校のネットいじめは、いじめ認知件数全体の15％前後から20％前後を占め、小学校及び中学校と比較して毎年一番多い。平成23年度の調査では、この項目は小学校から高等学校までの合計がいじめ認知件数全体のうち4.3％を占め、学校種別のいじめ認知件数の割合は小学校が1.1％、中学校が5.6％、高等学校が14.5％を占めた。高等学校は小学校・中学校と比べて件数が一番多く、学校種が上がるにつれて増加傾向にあることが報告されている（文部科学省，2012）。

このネットいじめの定義は明確にされていないが、いじめの定義については、2007年以降、文部科学省が「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」としている。一定の人間関係にある者は、学校内外を問わないとし、客観的に判断される行為や勝手な憶測によっていじめは判断せず、被害者がどのような心理状態にあるかという気持ちが重視されている。これについては、ネットいじめも同様であると考えられる。一方、Ybarra & Mitchell,（2004）は、ネットいじめを「オンライン上の他者に向けられた意図的潜在的な攻撃行動」とし、パソコンや携帯電話を使った強迫的な内容の電子メールを相手に直

表１　「パソコンや携帯電話などで誹謗中傷や嫌なことをされる」項目の件数および構成比の推移

年度／校種	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度		平成23年度	
	件　数	構成比	件　数	構成比	件　数	構成比	件　数	構成比	件　数	構成比	件　数	構成比	件　数	構成比
小　学　校	34	0.9	536	1.1	534	1.1	457	1.1	301	0.9	268	0.7	358	1.1
中　学　校	140	5.1	3,633	8.4	3,633	8.4	2,675	7.5	1,898	5.9	1,664	5.1	1,732	5.6
高等学校	30	18.4	1,705	20.5	1,701	20.4	1,271	18.9	948	16.8	974	14.7	870	14.5

件数は件、構成比は％

接送る、誰もが閲覧することができるWebサイトに相手の名誉を傷つけるようなコメントを投稿する、といったインターネットを通じたいじめはCyber-bullying（Belsey, 2005）、またInternet-harassment（Ybarra, 2004）とも呼ばれている（内海，2010）。そのネットいじめは、大人に比べて子どもの方が技術的にレベルは上であることが多く、そのいじめの実態は大人から見えにくい状況にある。これについてSmith（2011）は、ネットいじめは総じて隠すことや逃げることができずに被害者を多くの人の目にさらしてしまうという特徴があり、伝統的いじめとは異なる心理的負担と被害を与えることを指摘している。加えて、匿名により写真などが掲載されるといった場合もあり、不安や恐怖をあおられる可能性が非常に高く、被害者にダメージを与えることも推測される。

なかでも注目すべき点は、従来のいじめである伝統的いじめとネットいじめが併存していることにあるが（内海，2010）、その実態は明らかとされていない。併存した場合には、心理的負担がより高くなることが予想され、ネットいじめの対応はネットいじめだけを対象に対応するのではなく、伝統的いじめとネットいじめの両方の視点からいじめを捉え、個人の問題としてではなく集団に配慮した介入が効果的と考えられる。

その対応を考えるとき、仲間関係のあり方という観点から高校生を取り巻く環境を考慮することも必要である。森田・清水（1994）によると、いじめが発生するときは、「傍観者」「観衆」「加害者」「被害者」という「いじめの４層構造論」があり、なかでも、周囲で見て見ぬふりをする「傍観者」の存在は、いじめを抑制する、あるいは助長する重要な要因であることを指摘されている。森田（2010）によると、小学校５年生から中学校３年生における傍観者の出現比率は学校種が上がるほど増加し、中学校３年生では61.7％になると報告されている。オランダは中学校１年生、イギリスは中学校２年生で傍観者の出現がピークを迎え、学校種の上昇に反比例して出現が減少している。ネットいじめの対応を考える時にはこの傍観者が重要になってくると考えられ、ネットいじめを傍観している高校生の実態を把握し、対応に向けた知見を得るべきであろう。同時に、高校生を対象とするネットいじめの支援に対するニーズを把握することも重要である。

そこで、本研究では、携帯電話のメール及びブログにおける高校生のネットいじめの実態を把握し、今後のネットいじめの予防・低減に向けた対策を検討するための基礎情報を得ることを目的とする。

高校生に対する道徳教育や対人関係能力の向上に対する関心が高まるなか、ネットいじめに対する実態調査を検討することは、今後の学校教育における具体的な支援方法を作成する上で貴重な資料になると考えられる。

２．方　　法

調査対象

関東にある高等学校に在籍する325名の生徒が調査対象者となった。そのうち、記入漏れなどの回答を除いた322名（男子192名、女子130名）を分析対象者とした。いずれの調査対象者も携帯電話かパソコンを所持し、ネットを利用していた。

調査手続きと内容

2012年６月から７月にかけて調査を行い、調査実施は担任教師に依頼した。質問紙には記入に関する教示のほかに、プライバシーを保護することならびに回答は自由意思に基づいて行われることが記されていた。

ネットいじめの実態

１）高校生におけるメールやブログなどのネットの利用経験とその目的　メールやブログなどの利用経験の有無については「１、ある」「２、ない」で尋ねた。この質問で「１、ある」と回答した場合のみ、その内容については自由記述形式で記述することを求め

た。

2）ネットいじめと伝統的いじめの併存　ネットいじめを受けたことがある場合のみ、ネットいじめと伝統的いじめが併存していたかについて「1、ある」「2、ない」で尋ねた。この質問で「1、ある」と回答した場合のみ、その内容について自由記述形式で記述することを求めた。

3）ネットいじめの傍観者の実態　ネットいじめを傍観した経験の有無について「1、ある」「2、ない」で尋ねた。この質問に「1、ある」と回答した場合のみ、その状況について自由記述形式で記述することを求めた。

4）学校で受けたい支援　ネットいじめに対して学校で受けたい支援について自由記述形式で記述することを求めた。

3．結　　果

1）高校生におけるメールやブログなどのネット利用経験とその目的

表2は、ネット利用あり、なし別に性差を集計したものである。直接確率計算をおこなった結果、人数の偏りは有意であった（両側検定：$P = .046$）。したがって、ネット利用ありと性差に関連があるといえる。

表2　ネット利用と性差の関係

利用＼性差	男　子	女　子	計
利用あり	177	127	304
利用なし	15	3	18
計	192	130	322

使用目的については、5件以下の回答を除外してKJ法で分類し、ラベルをつけて、1つのカテゴリにまとめた。分類は2名で行い、一致率は93.5％であった。異なるカテゴリに分類された内容については、最終的に分類者間で調整し、カテゴリを決定した。メールの利用ありは304名（男子177名、女子127名）でその内容総件数は409件（複数回答）であった。ここで得られた主要なカテゴリは、友人・部活の先輩・家族といった相手に必要な用件のみを伝える「情報伝達（294：男子139、女子155）」、知り得た情報を共有しあう「情報交換（34：男子25、女子9）」、おしゃべりや本音のやり取りである「コミュニケーション（70：男子45、女子25）」、「用がなくてもメールをしている」「一日中、だれからもメールが来ないと寂しい」といった暇つぶしや「ちょっとしたことがあったとき、友だちなどにメールで聞いてもらうことがある」といった気持ちの伝達である「情緒的依存（7：男子2、女子5）」、よくわからないとする「その他（4：男子4）」に大別される結果となった。一方、ブログの利用人数は48名（男子21名、女子27名）で総件数は60件（複数回答）であった。暇つぶしや他人のブログを見るといった「情緒的依存（18：男子9、女子9）」、毎日の記録としての「日記（14：男子3、女子11）」、仲間探しや仲間との交流といった自己開示や他者とのつながりを目的とする「交流（23：男子6、女子17）」、趣味や関心ごとに関する「情報収集（4：男子2、女子2）」に大別され、少数であるがブログは「すべきもの（1：女子1）」と回答する生徒がいた。一致率は96.4％であった。これらの結果から、メールとブログは自分と他者をつないでいくツールとして日常生活で頻繁に使用される傾向にあることが推測された。

2）ネットいじめと伝統的いじめの併存について

ネットいじめを受けたことがあると回答した3名（男子1名、女子2名）のうち、ネットいじめと伝統的いじめの併存は2名が経験したと回答した。この結果は、併存している生徒がいることを指摘する内海（2010）の考えを支持する結果となった。女子は「その状況を話したくない」とし、いじめの状況を記述するまでに至らず、一方の男子は、「他の話題に広げて話をつなげていくことで仲間を増やし、いじめの状

況を解決することができた」と状況改善の対応を回答した。共通していることは、その状況について具体的な記述をしないということにあった。

３）ネットいじめに対する傍観者の実態

ネットいじめを見たことがあると23名（７％）の生徒から回答を得た。表３は、ネットいじめの傍観者経験あり、なし別に性差を集計したものである。

表３　傍観者経験の有無と性差の関係

利用＼性差	男　子	女　子	計
経験あり	9	14	23
経験なし	183	116	299
計	192	130	322

χ^2検定の結果、人数の偏りは有意ではない（$\chi^2(1)=1.33.ns.$）。したがって、傍観者経験の有無と性差に関連性があるといえない。つまり、ネットいじめの傍観者に性差の違いはないため、男女ともに傍観者になりうる可能性があるといえる。傍観者の体験と具体的な内容を表４に示す。無回答６名（男子３名、女子３名）を除く17名の回答をKJ法でまとめた結果、傍観者の体験内容は、「悪口（9）」「誹謗・中傷（4）」「ネットいじめと伝統的いじめの併存（2）」「ネット荒し（2）」に大別された。一致率は98.7％であった。悪口では個人の名前が

表４　ネットいじめにおける傍観者の体験

カテゴリ	具体的な記述内容の例	性　別
悪口（9）	イニシャルで悪口や暴言が書き込まれていた	男子１、女子２
	悪ふざけをして部活の活動を妨害したこと人に対して注意した友人が、翌日、ネット上で悪口が書かれ、クラスと名前が流出した。	女子
	友人が匿名で「ウザイ」「ぶりっこ」などいろいろな悪口を学校裏掲示板へ書かれた。	女子
	ある特定の１人に対し、みんなでネット上で悪口を言っていた。	女子
	本人がわかるように非難し、他校の生徒にまで広がった。	女子
	名前を出して悪口を書いていないが、あからさまにその人だと分かるような悪口が「前略……」といったスタイルで書かれていた。	女子
	弟の同級生がクラスメイトに対する悪口を書きこんでいるところを見た。	男子
誹謗・中傷（4）	ネットのブログに載せた友人の顔写真に対して「キモい」「ブス」などコメントしていた。	女子２
	匿名で別の人を名乗ってあることないことを書きこみ、それを見た人達が内容をわかってもいないのに、またそれに対して中傷している状況を見た。	男子
	友人が全く関係ない人を侮辱し、その動画をたたくコメントを書いていて不愉快だった。	男子
ネットいじめと伝統的いじめの併存（2）	日常のいじめの延長のようなもので、悪口が書き込まれていて気の毒になった。	女子
	クラスメートから嫌われていた人が、チャットで不快と思える発言を受けていた。	男子
ネット荒し（2）	好きな歌手に関するコメントを入れたことに対し、書き込んだ友人のブログに誹謗・中傷などが書き込まれ、荒らされていた。	男子
	「死ね」「ウザイ」「消えろ」などひどい言葉が並んでブログが荒らされている友人がいた。	女子

＊無回答６名（男子３名、女子３名）

表出されていることから個人情報の問題とも関係し、誹謗中傷では匿名性を強調したネット特有の攻撃性の実態が浮かび上がった。ネットいじめと伝統的いじめの併存が見られ、時間と場所を選ばすにネット上でいじめが行われていることが推測され、男女ともにネット荒しがあることも示された。

4）学校で受けたい支援

ネットいじめに対して学校で受けたい支援についてKJ法で分類した結果、158人（49％）から183の回答を得た。一致率は97.6％であった。教師がネットいじめを受けた生徒の相談にのる、いじめ対応、心のケア、ネットパトロールといった「教師の支援（23）」、ネットいじめへの対処方法、加害者と被害者への支援、いじめ予防の教育、ネットいじめの影響やネットの危険性に対する講話、ネット知識の提供、情報モラル教育、人間関係に関する知識の獲得といった生徒への教育とパンフレット、アンケートの実施といった予防支援としてのちらしや実態調査といった「ネットいじめに対する学校教育における支援（118）」、ネットいじめに対する感想や支援の必要性の有無についての意見、自身の経験の振り返りなどの「その他（42）」の３つに大別された。ネットいじめに対する支援の多くは教師や学校の関わりを希望する傾向にあり、学校及び教師が果たす役割の大きさが示される結果となった。なかでも、ネットに関する知識や人間関係と関連性の高いいじめを含む対人関係のトラブルとネットいじめが生起したときの対処方法に関して、支援を希望する傾向が高いことから、複雑な対人関係を適切に対応するスキルを獲得するために集団教育が重要になってくるといえよう。つまり、現在の高校生は、学校教育において伝統的いじめとネットいじめの両方に対する教育や教師の支援を望んでいるともいえる。一方、無回答も166名（51％）と半数を占めた。この回答をした生徒の多くは、「ネットいじめを経験していない上に実際に見たことがない」とし、少数であるが「教師及び学校に期待していない」「個人で気をつけるべきこと」という意見もあった。

4．考　　察

本研究では、高校生のネットいじめの実態を把握し、今後のネットいじめの予防・低減に向けた対策を検討するための基礎情報を得ることを目的として、高校生におけるメールやブログの利用経験の実態とその内容、ネットいじめと伝統的いじめの併存の実態、ネットいじめの傍観の実態、学校に求める支援のニーズについて検討した。

高校生におけるメールやブログの利用経験とその利用目的

ネット利用の経験は男女ともに高く、出来事やその時に生じた気持ち、考えを伝達することや友人との情報共有といった利用の目的において女子は男子より多かったが、メールは連絡、ブログは感情や趣味など自分を他者とつないでいくツールとして利用されている傾向にあった。ネット利用の経験から人間関係の希薄性と関連していないことを示した赤坂・高木（2005）を支持する結果となったが、「いつでもどこでもだれとでも」友人と気軽につながっている状態の中でコミュニケーションをすることを可能にする反面、相手から返信がない場合は相手とのつながりに不安や不信、孤独感をいだきやすくなり、相手との関係を損なわないために義務的に行う場合は感情が揺さぶられて心身の不調を招く恐れもあることが推測された。ネット利用が高いということは自己開示が多くなり親密性が高まり（木内・鈴木・大貫，2008）、相手と密着した人間関係に陥りやすくなるため（赤坂・坂元，2008）、相手と自分のほどよい距離感と自他を尊重しあう共感性を重視したコミュニケーション力を身につけることが重要になると考えられる。メールは連絡や情報伝達及びコミュニケーション、ブログは感情や趣味など自分と他者をつないでいくツールや自分を見つめなおす日記として使用する傾向に

あることが明らかとなったが、相手とのやり取りが本音で行われているのか、嘘の気持ちであって友人を続けていくためにやり取りを行っているのかということまでは本研究では把握できなかった。この点は、コミュニケーションスキルを支援していくうえでも重要な視点になると考えられるため、今後の課題である。

ネットいじめと伝統的いじめの併存について

ネットいじめと伝統的いじめの併存は２名が経験したと回答し、男女ともに併存していた経験があることから、ネットいじめと伝統的いじめの併存に男女差はないことが推測された。具体的な内容を回答しなかったことについては、心身に及ぼす負荷が大きいうえに、振り返って話すまでにはいかないほど負担が大きいのではないかと考えられた。以上より、ネットいじめと伝統的いじめでは、心身に及ぼす影響が大きく解決に時間がかかること、あるいは、人間関係のコミュニケーションを配慮しつつ、両側面に配慮する必要性があることが推測された。日常生活が先か、ネット上が先かといったいじめ発生については、今回の研究で明らかとされていないものの、併存した場合は、学校と家のどちらにかくれても居場所や安心感が保障されない可能性が考えられる。ネットいじめが生じてから対応するよりも、生じる前にネットに関する知識と情報モラルを向上させるだけでなく、自分も相手も大事にしたコミュニケーションスキルを獲得するといった心理教育の必要性が示唆された。これについては、携帯メールの利用において重視されるソーシャルスキルを研究した大貫・鈴木（2006）が、高校生は携帯メールの利用時に感情表現や相手の気持ちへの配慮を重視しており、日常におけるソーシャルスキルが高い生徒は気持ちへの配慮により気を付けていることを指摘している。つまり、日常のソーシャルスキルを育成することでネット上においても相手の気持ちに配慮できるようになるため、ネット上に対する直接的指導に限らず、対人関係のあり方を含む心理教育は非常に有意義で、さまざまな教育場面で指導できる可能性の広がりもあると考えられる。

ネットいじめに対する傍観者の実態

「悪口」「誹謗・中傷」「ネットいじめと伝統的いじめの併存」「ネット荒し」といった傍観の実態から、ネットに関する知識の習得と情報モラルの獲得と関連し、繰り返し学校教育の中で取り上げていく必要性が示唆された。同時に、伝統的いじめとの併存が指摘されていることに鑑み、学校が集団生活の中で人格形成を支援する利点を生かし、加害者と被害者のそれぞれに焦点をあてた支援だけでなく、傍観者に対してもネットいじめを予防する教育が必要で、対人関係を育むソーシャルスキルトレーニングといった心理教育の実践は重要であると考えられた。加害者・被害者への支援だけではなく、その周辺にいる傍観者に対する支援の必要性が指摘されている（渡辺ら，2000）ことから、学級及び学校全体に対して、ネットいじめに対する予防的・開発的教育を行うことが適切な対人関係を築いていく力につながると期待される。ネット未経験の生徒にはネット使用における配慮事項を学び、そして教師や学校に期待していない生徒や個人の問題とした生徒には、社会に出る前の集団教育の一環として社会性や情報モラルを身につけることを目的に、学校生活や授業で学ぶことを通して教師や学校と信頼関係を築く一助になるように支援が望まれる。

学校で受けたい支援や授業

ネットいじめに対して学校で受けたい支援は、「教師の支援」「ネットいじめに対する学校教育の支援」で、半数以上の生徒が教師からの支援や学校でネットいじめに関する教育を望んでいた。特にネットいじめを経験した２名の生徒はネットいじめの教育と教師の支援を切望しており、ネットいじめを解決したい考えを持つ可能性が示唆された。この時期の生徒の対人関係は相手の評価を気にして苦手や悲しみなどのネガティブな感情を抑制して自分を表出できずに葛藤する傾向にあることから（榎本，1999）、

教師の介入により解決したいのではないかと考えられた。支援について無回答の生徒の多くは、ネットいじめを経験していないことに加えて、実際に見たことがないとする傾向にあることから、集団に対するネットいじめに関する教育は、生徒がネットいじめに対する知識や対処方法を身につけるだけでなく傍観者を防ぐことにもつながるのではないかと考えられた。携帯電話やパソコンがコミュニケーションツールの一つとなっている情報社会に生きる生徒たちにとって、集団教育の場である学校の授業を通じてネットいじめに対する知識や対処方法などを身につけることができた場合、その集団全体がネットいじめに対して抑止力を高めていくことができるのではないだろうか。そのためには、教師自身がネットに関する知識やいじめに対する支援方法、心理的負担への支援を学ぶ必要がある。特に、心理教育で社会性を身につけることについては、日常生活におけるソーシャルスキルが高い人は、「相手の気持ちへの配慮」が指摘されていることから（大貫・鈴木，2007）、実態に応じたネットいじめに対する心理教育のあり方についても効果検証を行うことは今後の重要な課題である。

今後の課題

本研究では、ネットいじめの実態をネットいじめと伝統的いじめの併存、ネットいじめに対する支援のニーズについて捉えたが、説明力をあげるためにはネットいじめの現状に関する調査研究の積み重ねが今後は必要となるであろう。特に、併存した生徒の人数が少なかったことから、調査対象者を増やして調査する必要がある。同時に、面接調査や事例研究を行い、ネットいじめと伝統的いじめがどのようなところでつながっているのかといった文脈やネットいじめの種類による受け手の否定的感情の生起、相手とのやり取りが本音で行われているのか、それとも嘘の気持ちであって友人を続けていくためにやり取りを行っているのかといった調査も重要になってくると考えられる。さらに、生徒の多くは、ネットいじめの支援のニーズとして教師からの支援や学校でネットいじめに関する教育を望んでいることに鑑み、ネットいじめに関する知識と心理教育の両側面からネットいじめに対する支援教育の検討が望まれる。

謝　辞

本研究を進めるにあたって、調査にご協力いただいた高等学校の先生方と生徒の皆さん、調査の集計及び統計分析にご協力いただいた平野綾子氏に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、公益財団法人日本科学協会平成24年度笹川科学研究の助成を受けて研究が行われました。

【引用文献】

赤坂瑠以・高木秀明（2005）．携帯電話のメールによるコミュニケーションと高校生の友人関係における発達の特徴との関連　パーソナリティ研究，13，269-271.

赤坂瑠以・坂元章（2008）．携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響－パネル調査による因果関係の推定　パーソナリティ研究，16，363-377.

Belsey, B.（2005）. Cyberbullying: An emerging threat to the “always on” generation. http://www.cyberbullying.ca/pdf/Cyberbullying_Article_by_Bill_Belesey.pdf. August 25, 2008.

Beran, T., & Li, Q.（2005）. Cyber-harassment: A study of a new method for an old behavior. *Journal of Educational Computing Research*, 32, 265-277.

榎本淳子（1999）．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，47，180-190.

Ishii, K（2004）Internet use via mobile phone in Japan. *Telecommunications policy*, 28, 43-58.

木内泰・鈴木佳苗・大貫和則（2008）．ケータイを用いたコミュニケーションが対人関係の親密性に及ぼす影響－高校生対する調査－　日本教育工学会論誌，32，169-172.

森田洋司（総監修）（1998）．世界のいじめ－各国の現状と取り組み　金子書房

森田洋司（2010）．いじめとは何か　中公新書

森田洋司・清水賢二（1994）．新訂版　いじめ－教室の病　金子書房
文部科学省（2008）．「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集（学校教員向け）
文部科学省（2012）．平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の問題に関する調査
内閣府（2013）．若者年のインターネット利用環境実態調査　http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h23/net-jittai/pdf-index.html.
内海しょか（2010）．中学生のネットいじめ，いじめられ体験－親の統制に対する子どもの認知，および関係性攻撃との関連－　教育心理学研究，58，12-22.
大貫和則・鈴木佳苗（2007）．高校生のケータイメール利用時に重視される社会的スキル　日本教育工学学会文誌，31，189-192.
Patchin, J. W,. & Hinduja, S.（2006）. Bullies move beyond the schoolyard: A preliminary look at cyberbullying. Youth Violence and jwenile justice, 4, 148-169.
柴橋祐子（2004）．青年期の自己表明に関する研究－中学生・高校生の友人関係を対象として－　風間書房
Smith, P. K.（2011）. *Bullying in schools: The research background rethinking school bullying towards an integrated model*. Dixon, R. Cambrindge University Press.
Smith, P., Mahdavi, J., Carvalho, M., & Tippett, N.（2006）. An investigation into cyberbullying its forms, awareness and impact, and the relationship between age and Gender in cyberbullying. Research Brief No. RBX 03-06. London: DfES.
遊橋裕泰（2006）．中学生及び保護者等の携帯電話利用実態調査レポート　モバイル社会研究所
Wartella, E. A., & Jennings, N.（2000）. Children and computers: Yew technology - old Concerns. *The Future of Children*, 10, 31-43.
Ybarra, M. L.（2004）. Linkages between depressivc symptomatoligy and internet harassment among young regular Internet users. Cyberpsychology & Behavior, 7, 247-257.
Ybarra, M. I., & Mitchell, K. J.（2004）. Youth engaging in online harassmrnt: Associations with caregiver-child relationshops, Internet use, and personal characterisatics. Journal of Adolescence. 27, 319-336.

付録　本研究における質問項目

1．以下の質問に対してお答えください。

(1) これまでにメールやブログを利用したことがありますか。当てはまる方に○をつけてください。
①はい（　　）、②いいえ（　　）

(2)「はい」と答えた方にお聞きします。メールとブログの利用目的は具体的にお書きください。

2．今、高校生におけるネット上のいじめが問題となっています。そこで、以下の質問に答えられる範囲でお答えください。

(1) あなたは「ネットいじめ」を受けたことはありますか。当てはまる方に○をつけてください。
①はい（　　）、②いいえ（　　）

(2)－1「ネットいじめ」を受けたことがある場合、日常生活の「いじめ」と重複していましたか。当てはまる方に○をつけてください。
①はい（　　）、②いいえ（　　）

(2)－2　上記の質問で「①はい」と答えた方に聞きます。「ネットいじめ」の内容について、答えられる範囲でお答えください。

(3)－1　あなたは「ネットいじめ」を見たこと（傍観）はありますか。
①ある（　　）、②ない（　　）

(3)－2　上記の質問で「①ある」と答えた方に聞きます。傍観したことのある「ネットいじめ」は、どのような状況でしたか。その状況について答えられる範囲で、お答えください。

3．ネットいじめに対して、あなたは学校でどのような支援、あるいは教育（授業）を受けたいと考えますか。以下に、自由にお書き下さい。